

東北 復興日記

まだまだ
まだまだ



▶▶ 210

原発事故によって子どもから高齢者まで日常生活が変わり、心や体の健康がむしろ悪化していきまされた。外遊びや農作業、キノコ採りなど、地域で当たり前だったことができなくなったり、制限されたりするようになりました。

子どもたちには肥満が、中高年には脳卒中が増え、心的



星槎大学副学長

細田満和子さん



放射線リテラシー必要

外傷後ストレス障害(PTSD)も指摘されています。追いつけをかけるように、福島出身というだけで非合理的な差別(スティグマ)にもさらされてしまいます。そこには、自分自身をけがれた存在と見てしまつ「セルフスティグマ」に至る危険もあります。

公害や病気などの犠牲者が社会から差別されることは過去にも起きており、水俣病やハンセン病が代表例です。昨年十一月三日、「ベテランママの会」代表の番場さち子さんと一緒に、ハンセン病療養所の長島愛生園(岡山県)を訪れました。写真。入所者の皆さんと交流し、資料館を見学する中、番場さんは「福島と同じ」と話していました。

感染性が低く薬剤治療が確立していても差別されているハンセン病を巡る状況は、福島で起きている状況にそっくりでした。差別された人々が自らの誇りを取り戻し、差別を乗り越えることは容易ではありません。出身地を伏せ、名前を変え、自分のことを語らずにアイデンティティーを隠すことは、自己否定となります。その状況を脱して自己を語る事ができるようになつた時、セルフエスティーム

(自尊心)を取り戻せるのですが、それには時間がかかっています。

原発事故による放射線被害は、検診の結果、当初危惧されていたより少なかったことが科学的には証明されましたが、放射線に関する一般的な知識があまりないである事が問題を深刻化させています。放射線について正しく知る。放射線リテラシーが必要で

◇ 細田さんと番場さんとの往復書簡の形でお届けしています。

※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結核プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。